

対立と両立の往還 —パラドックス状況を打破する一方法論—

Coming and Going between Antithetic and Compromise: Transforming Dilemma to Trilemma in Paradoxical Situation

内 藤 勲

Isao NAITO

和文要旨：

社会科学における対立的な関係「リガー VS レリバンス」は我々が社会的に構築したものである。このような構築されたジレンマはそこにはない別の視点を持ち込んで社会的に再構成することで解きほぐされる。しかしながら、対極的な視点の間で単純に妥協することは望ましくない。社会的に構築されたジレンマを解きほぐすためのよりよい方法論としてジレンマのトリレンマ化を検討した。

英文要旨：

The antithetical relation as “rigor vs. relevance” is socially constructed in our scientific societies. Constructed dilemmas like this are solved through socially reconstructing from another point of view. However, it is undesirable to make a compromise between opposite points of view. I think that it is more desirable way to solve constructed dilemma through transforming cross dilemmas into a trilemma.

和文キーワード：ジレンマ，トリレンマ，パラドックス，方法論，科学，社会的構築

英文キーワード：dilemma, trilemma, paradox, methodology, science, social construction

目 次

1. 緒言
2. ジレンマの背景
3. レリバンスとリガーの「対立」
4. ジレンマからトリレンマへ
5. 「学」と「現実」の往還：結語に代えて

1. 緒言

MIS Quarterly, Vol.23, No.1 (1999) では、情報システム論がリガー（厳密性）を重視するようになり、レリバンス（適合性）を失っているとして、特集を組んで情報システム論という対象におけるレリバンスに重点を置いた議論を展開している。このような対立は、情報経営学の研究プログラムを探求する際にとどまらず、「実用性」を求められる社会科学に共通する基本問

題でもある。同時に、リガーとレリバンスが対立的な概念であるのかという吟味も不可欠である。

このような特集に限らず、“VS” (versus) と表記しつつ対立的な状況の議論はよく行われている。しかし、対立的に語られる「対」は必ずしも二者択一を迫るものではない。多くの場合、VS と表記して対であることを示していても、どのような視点で対であるかは明示されない。本稿では、*MIS Quarterly* で取り上げられ

た「リガーとレリバンス」の対立を出発点として、方法論や概念間にも想定される「対」ととらえられる関係を解きほぐす考え方について探求したい。

2. ジレンマの背景

(1) 方法論の多様性と対立性

さて、そもそも科「学」とは何であろうか。Simon は「科学の究極の目的は、秩序なき複雑さの只中に意味のある単純さを見いだすことにある¹⁾。」と述べ、多数の著作において複雑性への対処について論考を進めている²⁾。Simon の主張に沿って、科学を“複雑な現実を単純に記述あるいは解釈したもの”とするならば、それらを何らかの基準で“整合的”に関係づけたまとまりである「学」門³⁾もまた科学であろう⁴⁾。

科学と呼ぼうが、学門と呼ぼうが、我々研究者が関与している成果としての「学」を“複雑な現実を単純に記述あるいは解釈する”ためのシステム（言うなれば、世界を見るための眼鏡ないし眼鏡セット）と考えれば、過程としての「学」は成果としての「学」を造り出すこと（世界を見るための眼鏡、ないし眼鏡セットを造ること）である。前者が製品であれば、その内実は製品技術と呼ぶことができ、後者を工程技術と呼ぶこともできる。「学」者（研究者）の責務の一つが「学」を作ることであるならば、言わば顧客である“実務家”に向けての製品技術について腐心すると同時に、いわば「学」の工程技術である「方法論」について考察することは、「学」の形成と発展に不可欠である。

本稿では、既述のように「学」を“複雑な現実を単純に記述あるいは解釈すること”にとらえたい。そのようにとらえられる「学」の過程では、必然的に複雑な現実を抽象化、一般化しなければならない。その過程においては、そもそも対象となる現実をそのままに捕らえることができるかどうかという立場に始まり、複雑な現実のどこに焦点を合わせて、どのような目的で単純化するのかなど、抽象化あるいは一般化の方法まで、様々な立場が発生する。これが多様な方法論が発生する一つの背景である。

抽象化や一般化の方法が異なれば、同じ現実から出発しても単純化された「成果としての学」

表1 さまざまな二項対立

実証主義	観念論
自然科学	文化科学
方法論的個人主義	方法論的集合主義
経験主義的	解釈学的
説明	理解
物的	心的
欲求	理念
社会名目論	社会実在論
法則定立的	個性記述的
普遍化的	個別的
統計的方法	事例研究
量的方法	質的方法

出所) 盛山, 2011, p.66

は異なるものとなる。異なる結果に対する批評・批判は、新たな方法論を生み出し、さらに方法論を多様化させることにつながる。「過程としての学」の成果の相違が方法論を多様化させるもう一つの背景である。

盛山 (2011) が様々な二元論対立 (表1) があり、どの二項対立も他のものとは完全に一致してはいないとしているように、複雑な世界を単純化するための方法論は多様であると同時に対立的でもある。

方法論に触れない研究者も多いが、片岡 (2010) は、機能主義【社会的世界を外部からの観察によって直接認識できる客観的実在物であると仮定】と解釈主義【社会的世界を構成員の意識作用の産物である意味世界としての社会的構成物であると仮定】の対立を取り上げ、自らの方法論的立場を解釈主義としている。佐藤 (1998) は、一般的には方法論的集合主義と対立するととらえられている方法論的個人主義に立脚しながら、社会変動の水準間移行を説こうとする。

また、方法論の対立を超克しようとする研究者も少なくない。沼上 (2000) は経営学的研究において変数システムという立場と主観主義的立場の間で対話不可能状態があるとし、対話可能性を取り戻そうと試みている。加藤 (2011) は、Burrell & Morgan の主観主義的接近方法【背

景の仮定：唯名論・反実証主義・主意主義・個性記述的】と客観主義的接近方法【背景の仮定：実在論・実証主義・決定論・法則定立的】の二分法に基づいて方法論についての議論を展開し、決定論 vs 主意主義の対立構造を技術システムの構造化という立場で乗り越えようとしている。

方法論の対立は、複雑な現実世界を捨象する際に何を捨てるかという研究者の価値観の問題でもあり、簡単に乗り越えられるものではないだろう。それにもかかわらず、見方の対立を乗り越えることがドン・キホーテ的な挑戦であればあるほど、それは魅力的な課題となる。他方、純粋に対立であるならば、その超克はご都合主義で対立する両者を使い分ける日和見的な折衷になりかねない。正反合 (thesis-antithesis-synthesis) に代表される弁証法によって、少なくとも形式的には対立の超克が可能であるかもしれない。しかし、弁証法もまた多様な方法論(したがって対立)を内包しており、形式的に統合する言葉を発明するだけでは、実践的には日和見的な折衷と何ら異なるものではなくなる。

筆者は弁証法に関わる哲学ないし論理学の専門家ではないので、対立の解消に関わってきた弁証法の立場で本稿の議論を展開するつもりはない⁵⁾。以下においては、見いだされている対立を実践的に解消するという立場で、ジレンマ(対立)のトリレンマ化という考え方を吟味したい。

Goodman & Elgin (1987) は、

私たちがここで素描しようとする知識論は、絶対主義とニヒリズムのどちらも認めない。すなわち、真理は唯一であるという考えも、真偽の区別は不可能だとする考え方も、どちらもしりぞける。私たちの理論は脱=構築 (deconstruction) よりも再構築 (改築 reconstruction) に重きを置き、本体論的世界も単なる可能世界も、あるいはいかなるレディメイドの世界も許容しない。(Goodman & Elgin, 1987, 訳書 p.3)

という立場を掲げている。あえて管見を述べれば、Goodman & Elgin の立場は、リガー (厳密) な理論的展開の果ての極論よりも現実的な

理解を優先しようとしている。确实性と不确实性の両方に苦しめられる知識よりも真性、信念、確証のいずれも必要としない理解を中核におくことで、対立を解消しようとする。こうした立場は、レリバンス (適合性) を追い求めるあまりに、対立する二つの立場を都合よく使い分ける日和見的な折衷主義ではない。

Goodman & Elgin の立場を“形式的な対立解消を先行させることなく、対立する二つの立場を受け入れた上で、現実を日常的感覚で理解しようとする健全な折衷主義”と呼べば、筆者は日和見的な折衷主義ではなく、この意味で健全な折衷主義でありたい。この立場で、「ジレンマのトリレンマ化」を議論するためには、何よりも見いだされているジレンマの吟味が不可欠である。

(2) パラドックスとしての対立

ジレンマという用語はパラドックスやコンフリクトなどの用語と共に組織論や経営学などの領域で専門用語として使われている。日常用語としてはもちろん、専門用語としてもジレンマはパラドックスなどと同じような意味で使用されている。このジレンマをパラドックスという概念から吟味してみよう。

キャメロン/クイン (Cameron & Quinn, 1988) は、パラドックスに類似した用語の意味を列挙して、それらと対比した形でパラドックスの特徴をあげている。彼らは以下のようなパラドックスに類似した用語を6つあげている。

dilemma (板ばさみ)：一つの代替案が他の魅力的な代替案に対して選択されねばならない状況である。

irony (皮肉)：予期しない結果、あるいは矛盾する結果が一つの代替案から生じるときに存在している。

inconsistency (不一致)：単なる過去のパターンからの逸脱、あるいはパターンの不連続である。

dialectic (相克)：定立 (thesis) に始まり、次いで反定立 (antithesis) が惹起され、総合 (synthesis) によって解決されるパターンである。

ambivalence (両面価値)：2つあるいはそれ以上の魅力的な (あるいは魅力的でない) 代替

案から選択しなければならない不確実性である。

conflict (葛藤)：一つの代替案のために他の代替案を犠牲にし続けることである。

ジレンマを含む6つの概念では、2つ以上の矛盾の間で選択がなされる必要がある。しかし、パラドックスでは矛盾する要素の双方が受け入れられ、存在している。矛盾をはらむ対立についての諸概念に対するパラドックスの主要な特徴は矛盾する、相互排他的な要素の同時存在である (Cameron & Quinn, 1988)。

Argyris (1988) は、論理的パラドックスと行動世界のパラドックスを区別して、厳密に言えばこれらが同じ特性を持っていないと述べている。物理学の世界ではごまかし (trick) はないが、行為の世界ではごまかしが重要な特徴となる。

Ford & Backoff (1988) は、以下のようなパラドックスに対する3つの見解を紹介し、そこから定義を引きだしている。

①相対論的見解：パラドックスは、見る人の心の中に存在する主観的現象と考えられる。この見解では、パラドックスは個人的に構成される。したがって、個人の外側に存在する、言い替えば、個人から独立した“事柄”としてパラドックスを定義する努力は、心得違いと考えられる。

②相互作用の見解：パラドックスは個人間関係のコンテキストに存在している。この見解のパラドックスは、メッセージが異なる抽象レベルで存在し、事実上対立しているときに、関係そのものの中にパラドックスが現われるという前提条件を持っている。パラドックスは社会的に構成される。

③弁証法的見解：この見解は観念や事象が、なんらかの解決を必要とするそれ自身の対立物を生み出すという原理に基づいている。パラドックスは、以前は否定されるか無視されていた対立物が相並んで置かれ、同時に現われるときに明らかにされる。これは内省あるいは相互作用を通じて起こる。

以上のような3つの見解から、彼らはパラドックスを「内省あるいは相互作用を通じて、互いに対立する傾向が、認知可能な近傍に生じるときに、個人によって構成されるある“事柄”

と定義している。

パラドックス、特に人間の行為の世界におけるパラドックスは個人的あるいは社会的に構成されるものである。相互作用そのものの解釈の主体が個人であることを考えれば、我々が扱おうとするパラドックスは心的あるいは社会的に構成されている。それは諸個人の思考や解釈の中に存在し、あるいはそのような志向や解釈が社会的に当然視されているものとして存在している。しかし、パラドックスを認め、考える能力が科学の過程においてはきわめて重要である (Cameron & Quinn, 1988)。パラドックスという見方は研究者や分析者の立場が創り出したものであるが、他方では、社会現象のダイナミックな変動を理解しようとする見方でもある。

目の前にある魅力的な二つの物的なモノから選択しなければならない二律背反とは異なり、「リガー」VS「レリバンス」のような行為の傾向性の場合には必ずしも二律背反的選択状況ではなく、パラドックスのように心的あるいは社会的に構成された二律背反である場合が少なくない。本稿では純粋なジレンマ (二律背反) ではなく、パラドックス的なジレンマの対立構図を解きほぐす考え方について考察したい。

3. レリバンスとリガーの「対立」

(1) ジレンマの実態

リガーとレリバンスの対立的な見方の起点の一つとも位置づけられている *MIS Quarterly*, Vol.23, No.1 (1999) において、Benbasat & Zmut (1999) は情報システム論の研究が実践的適合性を失っていることを問題としており、その原因の一端を情報システム論が厳密性を重視するようになったことに求めている。問題とされている「適合性の喪失」は実務家の視点で指摘されている。すなわち、情報システムの構築や運営に関わる専門家が問題を解決するために、彼らが直面する世界を理解するためのシステムとしての役割を「成果としての情報システム論」が果たさなくなっていることを適合性の喪失と位置づけている。他方、厳密性に関してはそれほど詳細に吟味されていない。「方法論の正しい使用」や「目の前の課題に適切な分析」などが指摘されるにとどまっている。とは言え、厳密性で指摘している内容は、明らかに「過程

としての学」に必要と考えられる厳密性である。

Davenport & Markus (1999) も同様な立場を取っており、「リガー VS レリバンス」の対立性は、「過程としての学」の提供者による評価と「成果としての学」の利用者による評価の対峙であって、必ずしも“両立しない対立”(ジレンマ)と捕らえられているわけではない。「我々は研究者がビジネス界と学会の両方に貢献する潜在力を持っている“インパクトのある最先端”の概念が良い⁶⁾。」と述べて、リガーとレリバンスのトレードオフを示している。また、Benbasat & Zmut (1999) は「適合性は厳密でない方法で研究が実施される必要があることを意味していない。事実、管理者は厳密性を評価している⁷⁾。」と述べ、両立の必要性を主張している。

それにもかかわらず、「リガー VS レリバンス」は研究者にとって重要な課題として捕らえられている。例えば、2007年の*The Academy of Management Journal*, Vol.50, No.4においても実践的なレリバンスに関する特集が組まれており、リガーとの対比的な議論が展開されている。実践性を標榜する学問分野の研究者にとっては、理想的には解消できたとしても、研究においてリガーを追求するかレリバンスを追求するかという避けることのできないジレンマの実態が認知されていることも事実である。

Gulati (2007) は、対立構図を生み出す背景として種族根性 (tribalism) を持ち出して、社会的に構築される「リガー VS レリバンス」の対立構図を解消するステップを提示しつつ、陸上競技の大会がトラックとフィールドに分かれて進行するように、リガーとレリバンスに分離した領域で問題を追い続けることも良いことであると述べている。「リガー VS レリバンス」が定義的な対立性を持たないにもかかわらず、実践的な社会科学の分野では対立として認知されている。まさに、「リガー VS レリバンス」はパラドック的なジレンマである。パラドックスのような本質的には対立はないはずであるのに、対立が社会的に構成されている場合には、何らかの形で社会的に構成された対立を解きほぐすことで、ジレンマとして認知されている状況から脱することができる。そのためには、先ず、社会的に対立が構成された背景となってい

るリガー、レリバンスそれぞれの内容を吟味し、より明確にする必要がある。

(2) レリバンスの曖昧性

社会科学におけるレリバンス (適合性) が実務家の視点での評価であることは既述の通りだが、適合性を評価している実務家については特に吟味はされてこなかった。「成果としての学」を用いて問題を解決する実務家とはどのような人々 (tribal) であろうか。

例えば、情報システムの分野であれば、情報システムを構築するプロジェクトの責任者、情報システムの運用管理者、情報システムへの投資決定者、さらには情報システムにも気を配らなければならない経営者など、いずれも実務家と呼ばれる人々である。しかし、彼らが適合性を高いと評価する「学」が同じとは想定しがたい。プロジェクト責任者は ICT のハードウェアやソフトウェアの詳細にわたる研究の適合性を高いと評価するかもしれないが、ICT の副次的効果に関する研究の適合性は高くは評価しないだろう。しかし、経営者であれば、一般的には前者よりも後者の適合性を高く評価すると考えられる。

情報システムに限らず、すべての社会的な営みはその現場の実務であり、それを行っている人はすべて実務家である。主婦であれば、炊事、掃除、洗濯、育児などそれらはすべて実務である。ICT を活用して炊事と買い物をも有機的に結びつけ、効率化する方法について記述されているノウハウ書は、一種の「成果としての学」であり、主婦が適合性を高く評価するかもしれない。しかし、ICT を利用した安易なレシピ収集が料理における創意工夫を低下させるというような研究が仮になされたとしても、主婦はその適合性を高く評価するとは考えられない。しかし、幼児教育の実務家である保育園あるいは幼稚園の関係者が幼児に ICT をどの程度使わせるかを考えるためであれば、そのような研究の適合性を高く評価するかもしれない⁸⁾。

単に“実務家”といっても、その範囲は広く、仮に領域を限定していてもその境界は曖昧 (fuzzy) である。その上、個別の企業それぞれの特異な事情や個々の家庭の特異な事情など、一人一人の“実務家”の興味関心は極めて多様

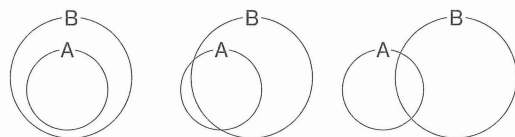
である。「厳密」に適合性を考えれば、適合性は「実務家」に応じた個別の特殊な興味関心に基づくローカルな（局所的）適合性しかない。もちろん、「実務家」の多様性を反映させながらも、多数の興味関心に基づく言わばグローバルな（大域的）適合性を考えることは可能であろう。しかし、いずれにせよ適合性を考えるための実務家の境界は曖昧であり、適合性の内容は幅広い。

また、「リガー VS レリバンス」という研究者にとってのジレンマの場合には、適合性の評価者が実務家ではなく、「実務家の興味関心を橋渡ししている」評価者であることも適合性問題を複雑にしている。その評価者が例え多くの実務家と情報交換していても、結局は限られた実務家の興味関心を代弁しているに過ぎず、接触した実務家のタイプに応じた評価しかすることはできない。さらに、実務家と情報交換している評価者からの情報に基づいて、あるいは部分的にしか表明されない実務家の公的発言⁹⁾に基づいて適合性が評価される場合、その適合性判断の間接性を考慮すると、実務家の境界の曖昧さ（fuzziness）とは別の意味で、その源泉は曖昧模糊（ambiguous）としている。

このように、レリバンスには多様性と間接性の存在という二種類の曖昧さがある。我々は、このような曖昧さを受け入れた上で、レリバンスの議論を続ける必要がある。もちろん、上記のような多様性と間接性では曖昧さに違いがある。二種類の曖昧さを考慮することは議論を複雑化させるので、以下では間接性については議論せず、特定分野の「実務家」を前提しているものとして、レリバンスを「実務家」の「学」に対するニーズへの適合性ととらえることにしよう¹⁰⁾。

(3) リガーの多面性

リガーが「過程としての学」に求められている



演繹的にA→B

相関的にA→B

A→Bではない

図1 社会科学における命題の真性の幅

る厳密性であることは既述の通りであるが、どのような厳密性が想定されているのかは詳述されてこなかった。多面的な厳密性についても検討しておく。

「学」を“複雑な現実を単純に記述あるいは解釈したもの”ととらえるのであれば、「学」としての記述は“真”であることを求められる。もちろんその“真”性については、形式論理学のような厳しい条件を付ける必要はない。演繹的推論（deduction）でなくとも、蓋然的推論（induction）あるいは仮説的推論（abduction）による抽象化や一般化も含めて「学」は形成される。例えば、図1のように、演繹的に命題 $A \rightarrow B$ が導かれる集合関係だけでなく、我々は相関的であっても命題 $A \rightarrow B$ を表明する。相関性が低い場合には、命題として表明しないのが研究者の倫理であろうが、その境界についての合意が得られているわけではない。厳密性には研究者の主張の真性を基準にして評価されるものがある。

研究者の「成果としての学」は、「リガー VS レリバンス」の問題が提起されたきっかけに取り上げられているように、論文などの表現物である。研究者が作成する表現物は言明の連鎖という形式をとる。表現物における個別の言明が真であったとしても、言明を連鎖させて組み立てる際に、その連鎖（以下、「論」と呼ぶ）には論理性が求められる。厳密性には研究者の成果物である「論」における論理性を基準に評価されるものがある。

研究者の主張は、複雑な現実を単純化しているだけでなく、何らかのかたちで一般化が行われ、カテゴリー化がなされている。例えば、「賃金を上げることで労働者の労働意欲は高まる」という単純な命題を考えてみよう。この命題が真であるとしても、この命題を現実に適応して問題解決することはそれほど簡単ではない。あるいは、この命題が真であるか否かを検証することも、データを得ることの困難さを除いてもそれほど簡単ではない。例えば、賃金が何を指すのかははっきりとはしていない。賞与は賃金なのか否か、無遅刻勤務の賞金は賃金なのか、家族手当は賃金なのか、など労働者に金銭を渡す機会は多様である。さらに、労働者の内容ははっきりとはしない。仕事をする者という意味

であれば、社長でも含まれることになる。例えば、労働者を工場で働く者と限定しても、その場合、工場勤務の技術者と工具を同じ労働者とするのかどうかも分からない。「学」における言明で使われているカテゴリーと現実との対応関係（カテゴリーの境界）は必ずしも明確ではない。厳密性には研究者が用いているカテゴリーと現実との対応性で評価されるものがある。

さらに、研究者の主張は複雑な現実を特定の見方で単純化しているので、その言明や論と既に蓄積されてきた多様な言明や論とが整合的であるとは限らない。研究者の専門的背景に応じて整合性を図る努力はなされるだろうが、多様な「学」のすべてを対象にして整合性を検証することはないし、そのような検証は事実上不可能でもある。企業組織を前提にして蓋然的に主張されている組織デザイン的发展段階モデルを参照して、社会システムとしての共通性だけで地域における共同体の発展を語ることには困難がある。領域を限定することは当然であるが、その領域内において蓄積されてきた知識（ここでは、多様に関係づけられた言明や論）と研究によって新たに明らかにした言明や論との整合性でも厳密性は評価される。

「言明そのものの真性」、言明を連鎖させた論の論理性」「カテゴリーと現実の対応性」と「言明や論と既存知識の整合性」はいずれも研究者が造り出した「学」の厳密性の指標である。このように、リガーは多面的な指標から構成されている。さて、レリバンスの曖昧さにおいても議論の複雑化を避けるために多様性を取り上げたが、厳密性においても同様に、以下の議論を単純化するために「言明や論と既存知識の整合性」を取り上げることにしよう¹¹⁾。

以下では、曖昧さが大きいレリバンスや多面性が高いリガーという概念ではなく、ここまで提示してきた「ニーズへの適合性」と「整合性」としての厳密性」を取り上げて、ジレンマのトリレンマ化を議論していきたい。

4. ジレンマからトリレンマへ

(1) 次元の拡大

Davenport & Markus (1999) や Benbasat & Zmut (1999) が主張しているように、「リガー

VS レリバンス」は研究者が板ばさみになるジレンマではあっても解消の可能性がある。研究者という「学」を造り出す者として厳密性に軸足を置くのか、研究者というよりは例えば評論家のような「学」を使うものとして適合性に軸足を置くのか、というパラドックス的選択状況を我々は社会的に構成し、対立する思想の一方を選択しなければならないというジレンマを社会的に構成してきた。

社会的な構成物としてのジレンマは、見方を変えることで矛盾しないものとして社会的に再構成することが可能である。それは容易ではないかもしれないが、決してできないことではない。そのためには、本質的には対立していないのにジレンマとして社会的構成にされた二つの要素の関係を解きほぐす方法論、新たな見方を導入する方法論が不可欠である。

社会的に構成されたジレンマを解消する単純な発想は、両極的に配置されて一次元で表現される対立を二次元に分割することである。図表3に示すように、形式的には簡単な操作である。「リガー VS レリバンス」として社会的に構成されている厳密－適合次元を厳密性の次元と適合性の次元に分割するだけである。先に議論したように、本稿では、ニーズへの適合性と既存知識体系との整合性を考えているので、厳密－非厳密という厳密性の次元は整合的厳密と断片的厳密の対立軸となり、適合－非適合という適合性の次元はニーズ適合とニーズ無関心の対立軸となる。もちろん、形式的な分割では対立の

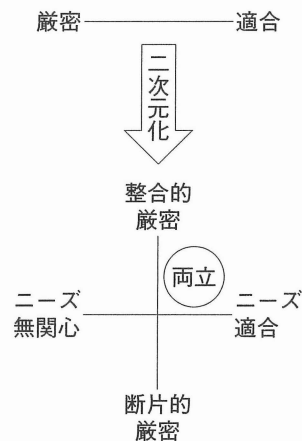


図2 形式的な二次元化

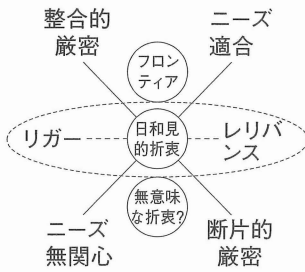


図3 相関によって構築されるジレンマ

両立を形式的に表現しているだけである。

図2に示した形式的な二次元化の第一象限(整合的厳密とニーズ適合)は、Benbasat & Zmut (1999) がリガールとレリバンスに対応するインパクトのある最先端を表現した図と同じものである。しかし、このような形式的な表現では、厳密性と適合性の対立が社会的に構成されている実態は表現されない。二つの次元を直交させた平面で考えることは、観察される事象の二つの次元についての特徴が無関係であることを含意している。現実的には無関係の要素の対立的関係が社会的に構成される可能性は低い。対立関係が社会的に構成されているということは、二つの次元で観察される特徴に相関性があると考えられているからである¹²⁾。

ここでは厳密性を高めることは整合的厳密を追求することとしているので、研究上の言明が既存の知識体系と整合していることを確認する記述や整合させるための言明の修正などの手続きを記述する必要がある。そのような記述によって「過程としての学」を実践する学会からの要求には応えることができる。しかし、「成果としての学」を利用しようとしている実務家にとってそのような記述は不要であり、そのような記述の充実ではニーズへの適合性は実現できない。他方、ニーズへの適合性を実現するためには、実務家が実務に応用しやすい端的な言明が必要であり、既存知識との整合性は実務家の常識に照らすような簡単なものだけで十分である。そのような記述に既存知識の体系との十分な整合性を期待することはできない。

整合的厳密性とニーズへの適合性は相関しており、図3のように「リガール VS レリバンス」という社会的に構成された対立はこの相関を表

現している。形式的に直交するように二次元表現することは一つのステップであるが、これだけでは Benbasat & Zmut (1999) が指摘した最先端(図のフロンティア)の位置づけがジレンマの外側にあることが明らかになるだけである。図中のフロンティアの位置づけを社会的に実現可能なものとして構成する方法を考える必要がある。さらに、図中の「無意味な折衷?」を本当に無意味と見なして良いかどうかとも吟味される必要がある。

(2) トリレンマ化

Weick (1979) は、W.Thorngate の議論を引用して社会科学においてはトリレンマが不可欠であることを示している。図4の GAS 文字盤に示されるように、普遍 (General)・精確 (Accurate)・簡潔 (Simple) を同時に追求することはできず、一つを犠牲にして二つの特性は追求することはできる。あらゆる社会科学の研究は GAS 文字盤の円周上に位置している。Weick は研究の目指すところは不遜な三冠王ではなく現実路線だと主張して、研究者は GAS 文字盤上での自分の位置を確認した後に、それ以外の位置の(特に反対側の)研究に注意を払うべきだと指摘している。

Weick の GAS 文字盤は平面に描かれているが、これは、図4に示すように、三次元トレードオフを平面的に表現しているものとも解釈できる。普遍・精確・簡潔のいずれかをあえて追求しないと言うことではなく、この三次元を可能な限り高くしようとするを前提すれば、

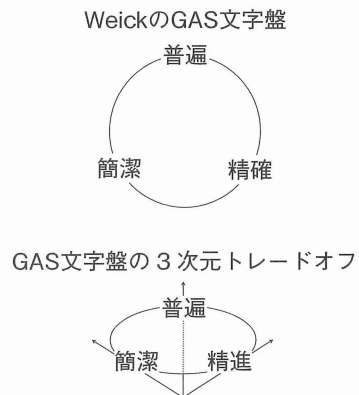


図4 トリレンマのトレードオフ

三次元にトレードオフは少なくとも一つの次元を犠牲にしていく円周上に描くことが可能である。このように GAS 文字盤を解釈すれば、円の内側はいずれかの次元での手抜きと解釈できるので、Weick の GAS 文字盤のように、研究者の立場は円周上を考慮すれば良いことになる。

GAS 文字盤のトリレンマは普遍・精確・簡潔の三次元トレードオフであるが、三次元から二つの次元を取り出すことで、普遍・簡潔の二次元から精確 VS 大まかのジレンマ、精確・簡潔の二次元から普遍 VS 特殊のジレンマ、精確・普遍の二次元から簡潔 VS 複雑のジレンマを構成することができる。二次元のトレードオフとしてのジレンマでは、ジレンマを構成する両極のいずれかを選択せざるを得ないように受け止められる。他方、三次元のトレードオフとしてのトリレンマでは、言わば極が円周を構成しているので、多様な選択肢を与えられることになる。二次元から三次元へと次元を増やしてジレンマをトリレンマ化することで、二者択一が多様な選択肢からの選択に変換される。これがトリレンマ化の効果である。

問題は、ジレンマという硬直した社会的構成を解きほぐすための三つ目の次元をどのように設定するかということになる。単に三次元を構成するだけであれば追加する次元は何でも良い。しかし、トリレンマが構成されるためには、第三の次元の極は当初の二次元の両極とジレンマを構成する必要がある。最も単純な方法は当初の二次元から構成されるジレンマと直交する関係を一つの次元として構成することである。「リガー VS レリバンス」であれば、図3の「フロンティア」と「無意味な折衷？」を極とする次元を構成することになる。

社会的に構成された「リガー VS レリバンス」の対立をそのままトリレンマ化することは難しいかもしれないが、その内容の曖昧さや多面性を吟味することを通じて「リガー VS レリバンス」を解きほぐせば、トリレンマ化は容易になる。図3のように、リガーを整合的厳密の追求に置き換え、レリバンスをニーズ適合の追求と解釈することで、当初のリガー-レリバンス対立は折れ曲がった整合的厳密-ニーズ適合の対立に変換される。もちろん、分割した二つの次

元のトレードオフとしてジレンマを解釈しながら、それぞれの次元の一つの極をジレンマの対極と重ねることは形式論理的には問題をはらんでいる。しかしながら、リガーの多面性やレリバンスの曖昧性を前提として、その一部に注目することで、図5のような三次元の関係を創り出すことは可能である。

その際、形式的な操作として整合的厳密-断片的厳密の対立軸とニーズ適合-ニーズ無関心の対立軸も折り曲げることで、整合的厳密の本来の対極である断片的厳密とニーズ適合の本来の対極であるニーズ無関心を重ねることができ。重なった箇所の研究（あるいは表現）は、自らの興味関心（ニーズ無関心）を優先して研究を進め、研究内容である言明の真性や対応性などの厳密性は考慮していても、他者が蓄積してきた知識との整合性を重視しない「自己完結性」の高い研究である。自己完結性を高める立場は言わば「自己満足」の立場でもあろう¹³⁾。ここで展開したトリレンマ化の中では、図3の「無意味な折衷？」は「自己満足」の極と解釈され、実質的に無意味ではなくなる。

このように、ジレンマを構成する一つの次元の内容を吟味し、二つの次元（四つの極）を組

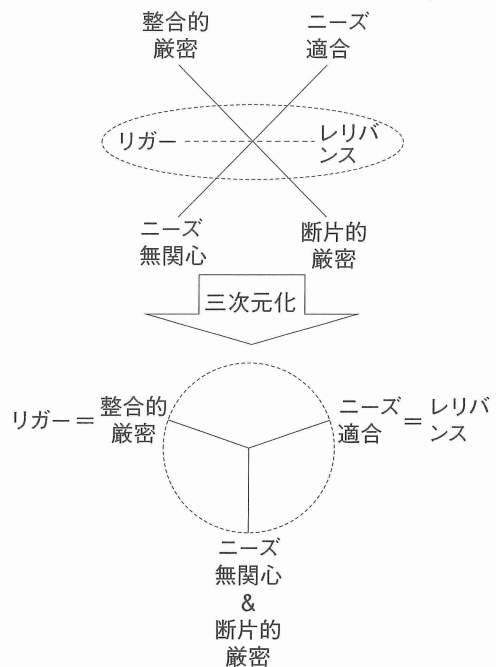


図5 三次元化によるトリレンマ化

み合わせて、当初の対立関係を表現できる交差でそれを表現し、当初の対立要素ではない二つの極を重ね合わせるといふ恣意的ではあるが形式的な操作によってジレンマはトリレンマ化される。もちろん、ジレンマをトリレンマ化することが目的なのではない。ジレンマを社会的に構成してしまい身動きがとれない状況をトリレンマ化によって解きほぐすことが目的である。トリレンマで表現される三極の中から二つを選んで追求する立場を具体的に表現することで、GAS文字盤のように社会的に構成されたジレンマを解消した姿を想定できる。同時に、当初とは異なる対立関係を表現することで、多様な対立関係の存在を示すことも可能となる。

「自己満足」ともいえる問題提起に基づいて研究を進め、その成果を既存知識の体系と関係づける¹⁴⁾ことに腐心する典型的な研究者は、従来から「象牙の塔の研究者」と呼ばれてきた人々である。そのような人々の雑誌は一般的な学内紀要のようなものであろう。“実務家”を対象とするニーズ適合を追求しながら、「象牙の塔の研究者」が造り出した知識も含んだ既存知識との整合性を保とうとする人々は、ニーズに適合するよう一般化されたモデルを形成しながら、ニーズに適合する問題解決に腐心する「良心的なコンサルタント」である。このような人々の雑誌は、Benbasat & Zmut (1999) が指摘しているように、ハーバード・ビジネス・レビューのようなものであろう。“実務家”を対象とするニーズ適合を追求しながら、「自己満足」ともいえる自己完結性の高い問題提起に基づいて言明を収集する人々は、断片的な解法であっても、“実務家”の関心に適合すれば表明していく「商業主義的ジャーナリスト」である。そのような人々の雑誌はいわゆる商業誌であろう。

「象牙の塔の研究者」「良心的なコンサルタント」「商業主義的ジャーナリスト」というラベルは第一義的には重要ではない。トリレンマの円周上にいる人々は研究者だけではない。「学」に関わる人々が研究者だけでないことが明らかになることこそが重要である。工業製品の製造販売において顧客ニーズが伝わりにくいように、「学」においてもそれを作る人々にそれを使う人々のニーズは伝わりにくい。「過程とし

ての学」にたずさわる人々は、いわゆる研究者だけではない。問題解決の補助をする人々や問題解決法の存在を啓蒙する人々など、工業製品の流通に相当する機能にたずさわる人々もいる。

「過程としての学」に関わる多様な人々の存在を認めることによって、“研究者”、“コンサルタント”、“ジャーナリスト”というラベルが重要になる。研究者を目指すのであれば、「象牙の塔の研究者」を目指さないとしても、厳密性を重視せざるを得ない¹⁵⁾。ニーズ適合がより重要だと考えるのであれば、「良心的なコンサルタント」か「商業主義的ジャーナリスト」を目指せば良いのである。背景となる知識体系との整合性を保ちつつ「学」を利用する手助けを志向すれば、コンサルタントを選べば良い。「学」の中の、ニーズに適合するけれど普及していない知識を広めたいのであれば、例え「学」の切り売りであっても啓蒙に役立つジャーナリストを目指せば良いのである。

5. 「学」と「現実」の往還：結語に代えて

「学」は「現実」を抽象しており、複雑性を単純化している。それ故、「学」の形成においては様々な対立関係も形成される。「リガー VS レリバンス」という対立関係もその一つであろう。学門の世界で研究が進むにつれて顕在化するこの対立関係は、学会（学門の世界）で社会的に構成された対立である。社会的に構成された対立が見方を変えることで再構成可能であったとしても、それは容易ではない。「学」に関わる者としての自らの立場を明らかにすることなく、ジレンマに対処するだけのために妥協することは決して望ましいことではない。本稿では、自らの立場を明らかにできるようなジレンマの再構成の一つの方法としてトリレンマ化を考察した。

もちろん、トリレンマ化はジレンマを解消する魔法ではない。社会的に構成されたジレンマを解きほぐし、現実的な選択を容易にする見方・方法の一つに過ぎない。しかし、形式的な二次元化では問題の発端となった「社会的に構成された対立」の状態を表現できず、三極構造化であれば、新たに多様な対立関係を発見すること

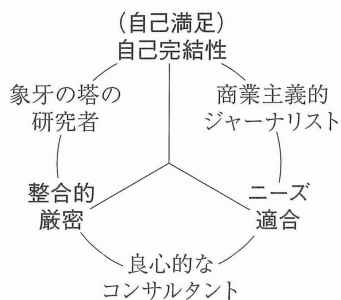


図6 「リガー VS レリバンス」のトリレンマ

が可能である。図6で明らかなように、トリレンマ化は、例えばニーズ適合と象牙の塔の研究という対立を顕在化させる。整合的厳密性と商業的ジャーナリストの対立や自己完結性と良心的なコンサルタントの対立も顕在化させる。もちろん、当初のジレンマにおける両極のどこに焦点を合わせるかによって、トリレンマ化の結果は異なる。リガーの多面的な内容からカテゴリーの現実との対応性を取り出せば、あるいはレリバンスの曖昧さの中から橋渡しの適合性を取り出せば、図6のトリレンマ図は異なるものになるだろう。それでも、当初の対立が単純に対立ととらえる必要は無く、それ以外にも多様な対立が存在し、その中で自らの位置を確認することが可能となる。

トリレンマ化は万能ではなくとも、単純化されたジレンマ構造に隠れている曖昧さや多様性がトリレンマ化の過程で明らかになる。より一般化すれば、三極構造化は複雑性を単純化した結果として現れる対極構造に隠れている曖昧さや多様性を浮かび上がらせる方法でもある。その対極構造がジレンマである必要もない。ジレンマとしての対極構造であれば、そのトリレンマ化は GAS 文字盤上の位置を選択する問題へと変換される。ある状態から別の状態への移行に困難が想定される場合には、それら二つの状態は対極構造を形成している。トリレンマ化の手法による対局構造の三極構造化はその困難を回避する考え方を提供する。

例えば、学生のレポート作成指導で悩みの多いコピー問題に三極構造化の方法を使ってみよう¹⁶⁾。ネット上のレポートを丸ごと機械的に写すコピーの対極にある自作レポートを作成するように我々は学生を指導するが、なかなか良

い指導方法は見つからない。本稿で議論した三極構造化の方法を適用する場合、まず形式的に二次元化することになる。コピー-非コピーと自作レポート-非自作レポートの二次元である。

コピーで問題としていることは機械的に手軽に複写して理解していないことにあるので、コピー-非コピーを複写-理解の次元とする。問題は複写行為にある。また、自作レポートに期待していることは、多くの文献・資料を参照して自分で考えてレポート化することである。指導の順序として、最初から自分で考えることを要求することは難しいので、多数の文献・資料を参照することを取り上げよう。自作レポート-非自作レポートを多数の参照-一つの参照の次元としよう。三極構造化して考える場合、最も問題のある複写と最も望ましい多数の参照(編集)を対立させ、その軸を折り曲げて二つの極を作る。図7のように、残った、理解と一つの参照を重ねると、初学者の水準であれば、一つの文献を要約することを三つ目の極とすることができる。

このような三つの極を想定して、複写(丸写し)から優秀なレポートへ向けて指導するためには、二つの方向がある。例え切り貼りでも良いので、レポート作成の際に複写した文献・資

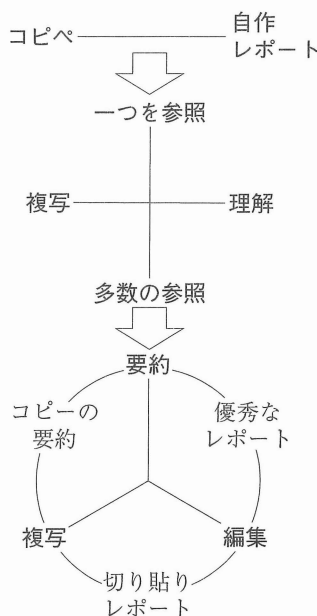


図7 コピー学生の指導モデル

料の数を増やす指導, 切り貼りのモザイク度を上げる指導を重ねることで, 優秀なレポートへ近づけることが可能であろう。また, 例え部分削除でも良いので, 長い文献を要約させる指導によって, 優秀なレポートへ近づけることが可能であろう。二つの方向を同時に行わせるとできない学生も, 片方ずつであれば我々の要求に応えることは可能である。両方の指導を個別に行って, 最後に, 優秀なレポート作成へ指導することで丸写しコピーの卒論を作成させない指導が可能となる。

ジレンマのトリレンマ化, あるいは対極構造の三極構造への変換は, 行き詰まって解決の困難状況を打破する見方を提供できる。この変換においては, 当初の対極構造を吟味することが必要であり, その際には現実に立ち返ることが不可欠である。複雑性を単純化したまままで思考を繰り返しても形成された対極構造を破壊することは困難である。もう一度, 複雑性の状況に戻って, 対極構造を解きほぐすことが必要である。「リガー VS レリバンス」の対極構造は, 「整合的厳密 - ニーズ適合 - 自己満足」の三極構造となる。当初の対極構造にもどってこの三極構造を眺めると, 象牙の塔 - レリバンス, リガー - 商業誌という新たな対極構造を見つけることができる。リガーを優先しようとする学会誌を一般の書店で販売しようとする際には, 新たな対極構造を解きほぐす必要が発生するだろう。対極構造を三極構造化で解きほぐすことは新たな対極構造を生み出し, その解消のための三極構造的理解はさらに別の対極構造を生み出すだろう。対極構造(対立)と三極構造(協調)を行き来することで, 世界の理解について多様な視点を持つことができる。「リガー VS レリバンス」というジレンマは, いわば同人誌であった学会誌の編集が商業誌としてのレリバンスへの方向性を持ったことが原因であったのだとしても, 研究者のみならず学会誌の位置づけを見直す十分な契機にはなっている。

「学」は複雑な「現実」の単純化を進めるので, 単純化した結果に不満があれば「現実」に戻る以外に満足な結果を得る方法はない。三極構造化は「現実」の方向へ戻ることであり, 新たな単純化へのステップでもある。そうして得られる新たな単純化に問題があれば, 再び, 「現実」

へ戻れば良いのである。本稿で議論した「ジレンマのトリレンマ化」ないし「対極構造の三極構造化」は, 問題意識として書いた「方法論や概念間に想定される対の関係を解きほぐす考え方」にはほど遠いかもしれないし, 単なるに発想法でしかないかもしれない。しかしながら, たとえ対立を超越する方法がどのようなものであれ, 「学」と「現実」を行き来し, 「構成された対立」と「健全な折衷」を行き来して, 対立を超越して我々の学門は進展していくものと私は信じたい。

〈主要参考文献〉

- 片岡登 (2010) 『リーダーシップの意味構成—解釈主義的アプローチによる実践理論の探求』白桃書房
- 加藤俊彦 (2011) 『技術システムの構造と革新—方法論的視座に基づく経営学の探究』白桃書房
- 沼上幹 (2000) 『行為の経営学』白桃書房
- 佐藤嘉倫 (1998) 『意図的社会変動の理論—合理的選択理論による分析』東京大学出版会
- 盛山和夫 (2011) 『社会学とは何か—意味世界への探究』ミネルヴァ書房
- 米盛裕二 (2007) 『アダクション 仮説と発見の論理』勁草書房
- Benbasat, Izak and Robert W. Zmud (1999) “Empirical Researching in Information Systems: The Practice of Relevance”, *MIS Quarterly*, Vol.23, No.1, pp.3-16.
- Cameron, K. S. and R. E. Quinn (1988) “Organizational Paradox and Transformation”, R. E. Quinn and K. S. Cameron (eds.), *Paradox and Transformation*, Ballinger Publishing.
- Davenport, Thomas H. and M. Lynne Markus (1999) “Rigor vs. Relevance Revisited: Response to Ben-basat and Zmud”, *MIS Quarterly*, Vol.23, No.1, pp.19-23.
- Ford, J. D. and R. H. Backoff (1988) “Organizational Change in and out of Dualities and Paradox”, R. E. Quinn and K. S. Cameron (eds.), *Paradox and Transformation*, Ballinger Publishing.
- Goodman, Nelson and Catherine Z. Elgin

(1987) *Re-conceptions in Philosophy and Other Arts and Sciences*, Hackett Publishing.

(菅野盾樹訳 (2001) 『記号主義：哲学の新たな構想』 みすず書房)

Gulati, Ranjay (2007) "Tent Poles, Tribalism, and Boundary Spanning: The Rigor-Relevance Debate in Management Research", *Academy of Management Journal*, Vol.50, No.4.

Simon, H. A. (1991) *Models of My Life*, Basic Books (安西祐一郎・安西徳子訳 (1998) 『学者人生のモデル』 岩波書店), サイモン, 一九九六, 訳書三九九頁, 傍点筆者)

- (1996) *The Sciences of the Artificial*, MIT Press (稲葉元吉／吉原英樹訳 (1987) 『システムの科学 第三版』 パーソナルメディア)

Weick, K. E. (1979) *The Social Psychology of Organizing 2nd*, Addison-Wesley. (遠田雄志訳 (1980) 『組織化の社会心理学』 文眞堂)

-
- 1) サイモン (1991), 訳書 p.399.
 - 2) 代表的著作がサイモン (1996) である。
 - 3) 通常「学問」と記すが、語源は学文あるいは学門である。本稿では、系統性を強調するために“問”ではなく、“門”の表記を用いた。また、scienceは通常「科学」と和訳されるが、学問とも訳される。
 - 4) 英訳する場合、いずれも science と訳される。
 - 5) 「つもりがない」というより、「できない」と述べる方が正確である。
 - 6) Davenport & Markus (1999), p.22.

7) Benbasat & Zmut (1999), p.5.

8) 言うまでもなく、ICTによるレシピ収集と創造性に関する研究は仮定の例にすぎない。

9) 例えば、インタビュー記事や事例紹介記事に登場する実務家が、興味関心のすべてを語ることはできないし、すべてを語ろうとするはずもない。その上に、紙面の制約もあり、記者が聞いた話がすべて掲載されるわけではない。

10) 「リガー VS レリバンス」というジレンマの社会的構成を議論するのであれば、間接性の考察が重要であるかもしれない。議論しやすさの点で間接性を無視する形で、多様性による曖昧性を受け入れて議論を進める。

11) 言明そのものの真性は研究者のみならず、表現者の倫理の問題でもあるので「リガー VS レリバンス」というジレンマの議論で触れる必要はない。本稿では、議論のしやすさで「整合性」を取り上げるが、「対応性」と「整合性」はどちらも重要である。

12) 一次元軸の大小による二類型を二次元軸の組み合わせで容易に四類型に増やせるので、田の字型の類型分類をよく見かけますが、次元間の関係性についての吟味がなされていないことも多い。一般的には、田の字型の分類をする際には二つの次元の独立性を吟味すべきである。

13) 自己完結性や自己満足のような新しい軸への命名には分析者の考え方が反映する。本稿で取り上げているトリレンマ化は、社会的に構成された次元の対立を解きほぐし、さらに多様な対立関係を自明視化することを目的としているので、分析者によるバイアスがあっても問題はない。

14) 既存知識との整合性を求める厳密性には、既存知識の一部を否定することも含まれる。

15) 自己満足への移行は、趣味的な現象の整理に過ぎないので本稿では議論しない。

16) 従って、本稿で議論した方法はトリレンマ化ではなく、GAS文字盤思考といった方が良いかもしれない。

